

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

— 政治と宗教の悲劇的葛藤 —

下 村 喜 八

1. はじめに

1950年にインゼル出版社から世に出た『大いなる断念』(Der große Verzicht)は、シュナイダーの戯曲作品の代表作である。1957年にオーストリアのブレーベンツで開催された国際劇作家コンクールで一等賞に選ばれている。成立は、作者自身の手記から判断して、1948年から49年にかけてであろうと考えられる¹⁾。

素材は教皇史からとられ、主人公はケレスティヌス5世である。彼は1294年7月5日に教皇に選出され、わずか5か月後の12月13日に辞任している。自らの意志によって平和な形で三重冠を放棄した歴史上唯一の教皇である。カトリック教会は彼を聖人の列に加えたが、ダンテは『神曲』のなかで「怯惰ゆえに大切な地位を辞退した人間」²⁾として、この教皇を地獄に落としている。その他の主要な登場人物は、デモニッシュな敵対者ベネデット・ガエターニ（後のボニファティウス8世）、権力欲に取りつかれながらも王であることの重荷に悩むナポリ王カール（シャルル）2世、王位継承者としての身分を捨てて司教となる皇子ルードヴィヒの3人である。

これらの人物たちが初めて作者の心を深く捉えたのはナチスの時代の1939年の初夏であったとして、シュナイダーは次のように記している。「世界は1294年と同じように再び激しい震撼に直面していた。誰が支配すべきなのか、また支配することが許されているのか。権力は正当化され得るのかといった諸問題が不可避になっていた。歴史は直接的に聖なるものに移行し得るのであろうか。この時代のなかで救いは可能なのであろうか。しかし、もう時間がないことを私は知った。破局が目前に迫っていた。そして私は当時、この素材を造形する平静さをもう見出せなかった。」³⁾

ところが第2次世界大戦後の1948年頃、同じ素材が再びシュナイダーの脳裏に浮かび上がってくる。彼はこう書いている。「廃墟のなかでの人物たちが再び姿を現した。彼らは同じ疑念を口にした。というのも、破局は、真の秩序とは何であるのかという問いに対する答えとはならなかつたからである。権力の世俗化は阻止されていなかつたし、ましていわんや終結してはいなかつた。次の嵐の見取図が空に描かれていた。—— そしてそれらはもはや消え去らなかつた。権力の悪魔化のプロセスが打破されなければ、支配することは罪である。しかし断念することも罪

である。」⁴⁾

敗戦はドイツ人にとって、歴史の新たな出発の時、その思考と行動において根本的な転換を行う無比のチャンスであるようにシュナイダーには思えた。彼は過去の行為に対する罪責の自覚とその告白、さらに償いの大切さを国民に訴えかけた。そして、拙論「ラインホルト・シュナイダーの平和思想」⁵⁾で述べたように、報復の論理によってではなく、平和のために贖いを自分の身に引き受ける人間によって初めて真に平和な秩序がもたらされることを説いた。しかし事態はシュナイダーの期待する方向には進まなかった。

1948年6月の通貨改革、それに次ぐベルリン封鎖によって東西の対立が激化したこととともに、ドイツ国内に再軍備を促進する動きが活発になった。ドイツ連邦共和国のカトリック教会は、再軍備を強引に押し進めるアデナウアーポークを支えた。そのような動きのなかでシュナイダーは、再軍備によって軍国主義の回帰は避けられず、はじめて別の道を行く心構えをしたドイツ国民にとって致命的な結果を招くことになると考えた。また、戦争は人類の破滅を招きこそそれ、いかなる問題の解決にもならないこと、さらに、分裂した国民は同胞戦争の危険にさらされており、真先に世界の戦場になる可能性があるゆえに武装することは許されないとして、再軍備に反対した。また核兵器の問題に関しては、アメリカのカトリック神学者たちは、「正義の戦争」においては核兵器の使用も許容されると主張し、バチカンは防衛のためには核もやむをえないという立場を取った。それに対してシュナイダーは、一切の核兵器の製造と所有に反対し、「核の楯のもとには教会の立つ場所はない」⁶⁾と主張した。そして東ベルリンの雑誌『アウフバウ』に論文を投稿したことがきっかけとなって、彼は、さまざまな誹謗・中傷を浴びせられ、言論界から排斥される。これは「シュナイダー事件」と呼ばれている。今取りあげている『大いなる断念』は、こういった状況のなかで取ったシュナイダーの態度と主張を理解するうえで極めて重要な作品であると考えられる。

彼は1951年12月の手紙で次のように語っている。「私が時代のなかで行い、発言することは、最近のいくつかの作品の立脚点からのみ理解可能である。まさにそれゆれに、今私が始めた闘いは回避できない。この闘いは、私の使命と極めて密接に関係している。それは根本的には芸術的な使命でしかないのであるが、しかし私は、芸術のなかで発言することは実人生で責任を取るには及ばないという考えは受け入れることはできない。私の言うことを自分自身で行わないでいて、他の人々が実行してくれることを期待することはできない。」⁷⁾ここで「最近のいくつかの作品」と言われているなかには、当然この『大いなる断念』も含まれていると考えるべきである。シュナイダーは第2次世界大戦中より歴史的状況と深く関わりつつ考え、決断し、行動した作家であるが、特に1950年以降、彼が西ドイツを二分した再軍備論争のなかで主張した平和思想がまでのこの作品のなかに表現されているのみならず、そのような思想を体して生きる人間の運命（誤解、誹謗、中傷、孤独）までが先取りする形で表現されていると言える。

2. 作品の素材とあらすじ

作者の捉えた素材が、時代的にも空間的にも並外れた広がりをもつうえに、西洋中世史の専門家以外にはほとんど知られていないと推測されるので、作品の理解を容易にするために、まず作品の時代背景と粗筋を紹介しておきたいと思う。

(1) 時代背景

教皇権の頂点を築いた教皇インノケンティウス3世の死（1216）から、この作品に登場するボニファティウス8世の教皇就任（1294）までの間に、ヨーロッパの政治的状況は激変した。神聖ローマ皇帝の権威はフリードリヒ2世の死（1250）後、シュタウフェン家の断絶（1268）、ドイツ国王の大空位時代（1256～73）によって急速に衰え、代わって自律的な国民国家が台頭していく。それらのなかでフランス王権が次第にヨーロッパのヘグモニーを握ってゆくが、イタリアにおける同じアンジュー家のシャルル・ダンジューの支配は1282年、シチリアの反乱（いわゆる「シチリアの晩禱」）によって大きな打撃をうけ、シチリアはスペインのアラゴン王の手に移るとともに、南イタリアの支配権をも失う。この作品に登場するカール（シャルル）2世はその息子である。フランス勢力の浸透のなかで、イタリアは都市国家相互の対立、貴族たちの対立、上層、下層市民間の反目で政治的混乱がつづく。世俗権力相互の対立に加えて、世俗権力と教皇権の対立、さらには法王庭内部の権力争いという、二重、三重のせめぎあいのなかでしばしば教皇選挙が空転する。クレメンス4世とグレゴリウス10世の間では2年9か月、ニコラウス4世とこの作品の主人公ケレスティヌス5世の間では2年3か月も教皇座は空位であった⁸⁾。

(2) 作品のあらすじ

ニコラウス4世の死（1292）後、枢機卿会は教皇の選定をめぐって3派に分かれて2年以上も権力闘争を繰り返した末に、山中に住む一隠者に過ぎないマルローネのペトルスを教皇に選出する。枢機卿たちは、この篤信で汚れを知らぬ人物に戦乱の世の救いと、平和の樹立を期待したのであるが、弱い教皇を通して自派が支配権を掌握できるという思惑で一致した面もあった。教会の分裂と世の乱れに心を痛め、新しい時代のために自分が神の道具とし用いられることを願っていたペトルスは、気が進まないながらもこの選出を受け入れ、ケレスティヌス（セレスチン）5世と名乗る。枢機卿たちは直ちにローマに向けて出発することを促すのに対し、ナポリの王カール・アンジューはナポリに立ち寄るように頼む。王はシチリアの征服を計画していた。つまり、この島を自分の力によって再び教皇の統治下におこうとしたのである。ケレスティヌスはナポリへ向かう。剣によって支配しようとする王の考えを改めさせるとともに、王という職務の重荷のために病んでいるカールの魂を救おうと思ったからである。王は出征するために船隊と武器の祝福を懇願するが、教皇は拒否する。そこで王は彼の身柄を自分の居城に拘束する。この王と法王庭の対立、さらには世俗権力と結託した法王庭内部の権力争いのなかで教皇の職務を果たすためには、ケレスティヌスはあまりにも素朴で純粹、かつ無能であった。彼は王の希望をいれた新しい枢機卿を任命し、フランスとイギリスに十分の一税を認める。それは、王の魂を救うためには

まず王の心を獲得することが大事であると考えての措置であったが、枢機卿たちには、ケレスティヌスは、王にあやつられている傀儡にしか見えなかった。この世を救う力強い聖人を渴望していた枢機卿たちの落胆は大きかった。特にベネデット・ガエターニは、この教皇の選出が本当に正しかったかどうかと疑い、教皇を試す決心をする。嵐の夜、彼は助任司祭に命じて、壁の隙間から教皇の寝室に自分の言葉を叫ばせる。お前は本当に選ばれた人間なのか。お前は無能で弱い。王の言いなりになって、教会の栄光を踏みにじってしまった。お前の支配は教会に対するサタンの勝利だ。お前の生は冒瀆にほかならぬ。お前は地獄に落ちる。お前の頭から王冠を取りのけよ、と。それはケレスティヌスにはまるで天上の声のように響く。彼は激しい良心の苦悶のあと、教皇位の座をおりる。罪をおかすことなく最高の職務を果たそうとしたこの純粋な人間は、もろくも挫折したことになる。枢機卿会は後任にベネデット・ガエターニを選出する。ボニファティウス 8 世である。彼は神政政治の名のもとに見境のない権力拡大・強化をはかる。たとえば、武器の祝福も破門権の行使も拒否したセレスティンとは対照的に、カール王の武器を祝福し、シチリア王を破門し、この島を教皇の支配下におさめようとする。教皇権の王権に対する優位を主張してフランス王フィリップ 4 世と衝突。アナニー滞在中に襲撃をうけ、王座から突き落とされる屈辱を味わう。一方、教皇の座を下りたセレスティンは、ボニファティウスの追手に捕らえられ、伝承に反してこのドラマでは、幽閉中にボニファティウスの元の助任司祭によって暗殺される。信仰の力、愛と平和の力はこの世の権力に完全に敗北したように思われる。歴史は強者の成功を許容し、良心的な人間を否認しているように見える。しかし権力欲にとりつかれたボニファティウスはその権力欲ゆえに身を滅ぼすことになる。そして彼が後に残したものは破壊と憎しみだけであるのに対し、ケレスティヌスは人の心のなかに権力からの自由と宥和を生じさせる。ナポリの皇太子ルードヴィヒはケレスティヌスの生き方に倣い権力の座にくつことを放棄して司教となり、カール王は、遅まきながら王冠を放棄する。

3. 時代

旧約聖書の預言者ダニエルは、夢のなかで見た幻を記している⁹⁾。四頭の大きな獣が海（混沌）のなかから次々と上がってき、一時世界を支配するが、ついに滅んでゆく。第一のものは、獅子のようであったが、鷲の翼が生えていた。バビロニア王国を表していた。第二の獣は熊のようで、三本の肋骨を口にくわえていた。それはメディア王国を表していた。次に姿を現したのは豹のようであって、背には鳥の翼が四つあり、頭も四つあった。これはペルシア王国を指していた。最後に現れたのは、十本の角と巨大な鉄の歯をもった途方もなく恐ろしい妖怪であった。これはギリシア王国を象徴している。それらの国の支配は、人間にではなく獣にたとえられるような残酷なもので、破壊に次ぐ破壊、殺戮に次ぐ殺戮であった。しかしそれらはいずれも一時は隆盛を誇るが、次第に力を失って没落してゆく。

『大いなる断念』に描かれている時代状況はダニエルが見た幻の構図に似ているように思われる。罪と結託した一つの権力が強大になり、それが、同じく罪と結託した別の権力によって滅ぼされ

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

てゆく。歴史とはそういういた権力の興亡の繰り返しに他ならない。

作品に描写されている時代は13世紀末の10年に集中されているが、会話や夢中劇のなかで報告されている時代はそれよりも数十年前、シュタウフェン家の最後の時代まで遡る。すなわちルードヴィヒが見る夢のなかにコンラディンが登場し、ルードヴィヒの祖父にあたるカール（シャルル）・アンジューによって捕らえられ処刑される。コンラディンとその叔父の息子たちは囚人となり、ナポリにあるカール2世の居城の地下牢でもう20年以上も「壁に塗り込められた生き埋めの人生」¹⁰⁾を生きることを余儀なくされている。カール2世はかつてシチリアをめぐる戦争で捕虜となった経験をもっているが、今までシチリアを取り戻す機会をうかがっている。

次第に力を増してきたフランス王フィリップ4世は「権力以上に好ましいものは何も知らない」(364)。彼は、教皇権の至上性を主張するボニファティウス8世と対立している。ボニファティウスは敵対するコロンナ家に対して十字軍を宣布し、その本拠パレストリーナを跡形もなく破壊し、灰塵に帰せしめる。それに対しコロンナ家のシアッラは、怨念を晴らすため、フランス王の側近ギヨーム・ド・ノガレと謀ってアーナーに教皇を襲い、これを辱める。

ドイツ王アドルフを殺害したオーストリアの王アルブレヒトは、甥とその共謀者によって撃ち殺される。アルブレヒトの王妃は二人の息子に、考え出し得る限りの残酷な仕方で復讐することを誓わせ、実際におぞましい復讐がなされる。まさに時代は「剣が支配する世紀」(410), 「血がこごえてしまう」(438)世紀である。カール王の尚書は次のように語っている。「(相次ぐ戦争に)国民たちはとても暗い気分にとらえられています。多くの人間は修道院に逃げ込み、世の終わりを予見している者もあります。あるいは少なくとも前代未聞の出来事が生じるだろうと思っています。すなわち王たちの戦い、滅亡、支配者たちのおぞましい死が。」(358)同時代を生き、この混乱の世を深く悲しんだダンテ(1265～1321)は、『神曲』のなかで、先に触れたケレスティヌス5世とともにボニファティウス8世をも地獄に落とし、教皇位の篡奪者として聖ペテロに激しく弾劾させている¹¹⁾。

預言者ダニエルは諸国の没落のなかに神の裁きを見てとった。権力の興亡のなかに「審判」としの歴史を見る歴史観は、この『大いなる断念』では同じ著者の歴史書『島国』におけるほど明瞭に読み取れないとはいえる、後を見るように、権力が自分の為した悪ゆえに滅んでゆく様が、見事に捉えられていると言える。

預言者ダニエルは、さらに別の幻を見る。

見よ、「人の子」(メシア)のような者が天の雲に乗り、
「日の老いたる者」(神)の前に来て、そのもとに進み
権威、威光、王権を受けた。
諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え
彼の支配はとこしてに続き

その統治は滅びることがない¹²⁾。

この第 2 の幻では天下の全王国の王権、権威、支配の力は、永遠に、いと高き方の聖なる民に与えられることになる。

4. ケレスティヌスとボニファティウス

シュナイダーはこの作品のモットーとして、「あらゆる秩序を支える柱が崩れ落ちてしまったら、正しい者に何ができるようか」という聖書の言葉を掲げている（詩篇 11 篇 3 節）。そしてこの作品では、秩序の崩壊した世を正す人間として選ばれたのがケレスティヌス五世である。彼には、新しい時代、霊の時代 (das Zeitalter des Geistes)、非暴力の時代 (das Zeitalter der Gewaltlosen) の招き手となる期待がかけられた。そして彼は民衆からは聖人として慕われ、「天使教皇」として歓迎された。実際、彼は完全にキリストの「まねび (Nachfolge)」に身を捧げている。幻を見、預言をすることができ、「純粋な心」と平和 (Friede) の力をもっていて、肉体の病に苦しむ人々の苦痛を和らげ、魂に平安 (Friede) をもたらすことができる。彼の信仰は、この世の苦悩と共に苦しむ愛という形をとって働く。彼は、アッシジの聖フランチェスコのように、小さな動物や魚の命をもいとおしむ魂をもっている。しかし、素朴で純粋であるが、まるで子供のようにこの世にうとく、ラテン語を初め、教皇という職務が要求する知的な素養を欠いている。部下の狡猾さや敵の陰謀に対処する能力ももっていない。この世の制度の長として職務を果たし、自己の意思を実現するためには、この世の知識と手段を、適切かつ巧みに用いなければならぬであろうが、彼にはそのようなことは理解の外にある。しかし彼は福音の精神に生き、行動するという点では並外れて誠実である。「彼は人の魂に静かな力をおよぼす」(298)。それは平和の力である。キリストのまねびと平和の力という点において、ケラー氏も指摘しているように、彼は見かけほど弱い人間ではない。「彼の強さは、ひとつひとつの魂のうちに内的平和を、そして対立する軍事ブロック間には外的平和を生み出そうとする努力のなかに表れる」¹³⁾。権力の拡大を図りながらも、その権力が生み出す悪に苦しみ、魂を病んでいるカール王に改悛を迫り、魂を癒そうとする。それはまず個々の魂を愛する司牧者 (Seelsorger) としての行為であるが、同時に王がもたらす災厄から国民を守ろうとする行為でもある。さらにケレスティヌスは、シチリア遠征に向かおうとする王の船団と武器を祝福することを頑なに拒否する。彼は最も心を許している修道士アンブロシウスに次のように語っている。

世界は剣に支配されています。しかし私たちは人を殺してはなりません。けっして殺してはなりません。というのも私たちは、主が為さった通りに為すべきだからです。あなたは考えられますか。われわれの救い主イエス・キリスト、人間の姿となられた純粋なことばなる主が、剣を抜いて人間の胸を刺し、その剣を彼の聖なる手でぬぐい、鞘に収める。そしてまた同じことを繰り返すなどということが考えられますか。—— それは冒瀆です。主がもし私

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

たちの中に生きておられなければ、私たちはどうして主の名前にあづかくことができるでしょうか。(410)

また、カール王に対してはこう語る。「確かに私の前任者たちは、シチリアの統治権という重荷を私にゆだねたのであるが、私は剣とそれが行う途方もない残虐行為によって統治権が明白になることを望まない。われわれ二人は征服が何をもたらすかをよく知っている。あなたは王として、かつ最高指揮者として、そして私は貧しい庶民の子供として知っている」(342)。王の居城において幽閉と同然の状況にありながら、毅然として拒否しつづけるのは極めて勇気ある態度であると言わなければならない。そしてこれは、歴史的には、「その当然の結果として、王座と祭壇、国家と教会との聖ならざる同盟の解消を意味する」¹⁴⁾。さらにケレスティヌスは、ベネデット・ガエターニが王を破門することを進言するが、これをも拒否する。「王とその国を呪えと言われるのか。教会は門を閉ざしてはならず、鐘は鳴りやむようなことはあってはならない。瀕死の人間が司祭を呼んでも誰も来てくれないようなことはあってはならない」(345)と。そればかりではない。ガエターニから、教皇の支配権を無視してシチリアを支配しつづけているアラゴン王の破門を要求されるが、これをも拒否する。

さらに、彼には冷静な自己評価も欠けてはいない。自分の精神が貧しいこと、意志が弱いこと、病弱であること、世間知らずであるため職務の要請に応ええないことがある程度知っていた。しかし彼には、自らのうちに三重冠を欲する気持ちもあった。そこに彼は深い罪を見た。そしてこの罪は彼に自己分裂をもたらし、彼を「二重人格 (ein Doppelwesen)」(346) にする。確かに枢機会で聖霊の働きのもとに選ばれたはずであるが、選びは本当に正しかったのであろうかという疑念が彼を不安にし、彼をおののかせる。自分自身に対する信頼の欠如、それが彼をいつそう弱く、無能にする。

ベネデット・ガエターニを初め枢機卿たちもこの選定に疑いをいだく。ケレスティヌスは「信仰の点では批判の余地はない」(293) が、あまりにも弱く、無能である。マテオ・ロッソは、教皇に直接こう語る。「私はあなたが理解できません。(中略) 私たちは聖者を待ちこがれていました。しかし力をもった聖者を。なぜなら力をもつ聖者のみがこの世を救うからです。」(339)

教皇を試み、その高座から引きずり下ろすガエターニも、悪人ではあるが、けっして「残酷さを喜ぶ悪人ではない」¹⁵⁾。ケレスティヌスの頼り無さに絶望しながらも、他方で、ケレスティヌスのなかに「ナポリの港に停泊中の艦隊のなかにある力よりも高い力が宿っているかも知れない」、「もしかして彼はすべてのものの尺度になる人間であるかも知れない」(294) と自問している。そしてもし彼が選ばれた人間であるならば、彼を励まし、彼を助けて、彼のもつ正義に力を貸さねばならないと考えている。ガエターニは、登場人物たちの言葉を借りて表現すれば、救いのため、教会の名声のために情熱を燃やしている男、反教会勢力に対する勝利に燃えている男である。

ガエターニの神観、教会観からすれば、ケレスティヌスに疑いを抱くのは当然であると言える

かも知れない。「権力に取りつかれたボニファティウス（ガエターニ）にとっては、神の全能と現実の教皇の無力とは折り合いがつかない」¹⁶⁾ からである。マテオ・ロッソ枢機卿もそうであるが、ガエターニは、この世の権力闘争のなかで、ダニエルの第 2 の幻にあるような力強き統治、全ての王と国民が膝をかがめるような支配を教皇のもとで打ち立てたい、いや、打ち立てなければならぬと考えている。

ところで、イエスを裏切ったユダは、初めのうちは、イエスが話術に長じ、奇跡を行う力をもっているので、ユダヤ人が久しく待ち望んでいたメシア、すなわちユダヤをローマ人の手から解放し、世界的な強国にする王であると見ていたが、イエスがそのような手法を取るのを拒むので、深く失望し、イエスを敵の手に売ったという解釈がある¹⁷⁾。教皇の弱さと無能を目にして選びを疑うガエターニは、そのようなユダの気持ちと相通ずるところがあるように思われる。さらに別の解釈によれば、イエスを敵に売ったユダの行為は、イエスの殺害を謀るものではなく、イエスを窮地に追い込むことによって力の行使を促すものであったという¹⁸⁾。それと同様、ガエターニの行動にも、ケレスティヌスを試みることによって、その強さを引き出そうとした側面もあった。教皇となったガエターニ、つまりボニファティウス 8 世は、グレゴリウス 7 世とインノケンティウス 3 世の時代の強大な教皇権——教皇による帝国、神政政治——を甦らせようとする。そして彼は、ケレスティヌスとは対照的に武器を祝福し、破門権を行使する。

あえて私の意志に逆らい、私の命にそむいてシチリア王を名乗るハイメの破門を取り消することはできません。私が彼の兄のアラゴン王に弟を相手に戦うことを命じたというのは本當です。（中略）私がシチリアの支配者だからです。私は私の権利を拒否されることにがまんなりません。私は剣を祝福し、かつそれを揮います。諸国民と王たちは私が両方の力をもっていることを思い知らなければなりません。（386）

ケレスティヌスは個々の魂をいつくしみ、平和と愛をもたらそうとしたが、ガエターニは、縦横に亀裂の走った世界を恐怖によって結び合わせ、恐怖の上に建築しようとする。「全世界は神の国とならねばならない。世界を神の国とするためには——それは恐ろしいことだが——愛を否定して恐怖によって強力になった人間が存在しなければならない。」（362）このように語るボニファティウスには神の名のもとにおける権力の美化、政治や権力のための信仰の悪用が見られる。

1948 年、西ドイツの再軍備を進める動きのなかで、ドイツ連邦共和国のカトリック教会およびローマ・カトリックが取った態度と、ナポリ王の武器を祝福し、敵を呪うボニファティウスの態度とは、消極的と積極的との違いはあれ、ある種の重なりを見せてくる。そしてケレスティヌスの態度は、「山上の説教」の愛敵の戒めを文字通りに解し、ラジカルに非暴力を主張するシュナイダーの立場と一致する。

ケラー氏は「彼（ボニファティウス）の破壊衝動、次第に強まる現実喪失、誇大妄想、迫害妄想は、ひとりでに、シュナイダーが採寸の尺度としているヒトラーを思い出させる」¹⁹⁾ と言って

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

いるが、正しい指摘と言えよう。彼は過激さ、性急さゆえに、自分で自分の墓穴を掘ることになる。彼は自分が退位に追い込んだケレスティヌスの影におびえ、疲れぬ夜を過ごす。アナニで襲撃され、辱めを受けたあとは、悲嘆と羞恥のかたまりとなり、「自分の手を噛み、壁に頭をぶつける」(437) ありさまで、ほとんど錯乱状態のうちに息をひきとる。

さらに、これはこの作品では取り扱われていない事実であるが、ケラー氏も指摘しているように、この教皇の生涯と働きが誤りであったことを歴史は極めてアイロニカルに証明している。なぜなら彼は、教会に一時的な興隆をもたらしたことはたしかであるが、教会を分裂 (Schisma)，さらには没落へと導く原因を作ったからである²⁰⁾。

一方、ケレスティヌスは最後まで愛と平和の態度をもちつづける。刺されて瀕死のケレスティヌスは、友を通じて、自分を欺いたボニファティウスに、自分の信仰が弱すぎたことへの許しを請い、相手に魂の平安（平和）と教会の平和を望みながら死んでゆく。

5. 権力と罪責

(1) 神の国と地の国

シュナイダーは、アウグスチヌスの二元論的な歴史観を受け継ぐ形で、世界の歴史は神の国と地の国（あるいはこの世の国）の併存と対立・抗争の場であると考えている。『この世の国と神の国』等、幾つかの論文のなかでこの二つの国の性格について次のように語っている。この二つの国を動かす原理と力は二つの愛、すなわち「神への愛」と「自己愛」とである。神の国は「神へと向いた国、その秩序を神への愛によって規定する国」であり、地の国は、「自分自身を愛し、自分自身を欲する国、すなわちそれ自身の力（権力）を欲し、この世の力（権力）を欲する国」²¹⁾である。前者は平和 (Friede) を打ち立てようと努め、後者は不穏 (Unruhe) をもたらそうとする。しかし地の国の力は、目標を自己自身の内に求めるゆえに、根本的には目標をもっていないと言うほうが正しい。この力は自己を再生産、あるいは増殖しつづける性格をもっているため、その結果として不穏が生み出されることになる。片方は永遠の力の模写であり、他方は、自己のうちに破壊を内包している力である²²⁾、と。そして、われわれ人間は、自分の自由意志によって、歴史という時間の場で、この二つの力のどちらに味方するかを決定しなければならない。そして、「教皇、王、聖なる司祭たちは、おのれの自分の仕方で、自分の持ち場で、重大な歴史の時の中で、両方の国の相剋を経験した」²³⁾のである。

シュナイダーのドラマの多くは、二つの国、二つの力が火花を散らしながら厳しく対峙する戦いの前線で展開される。この作品もそうである。ケレスティヌスとカールの対立、ケレスティヌスとボニファティウスの対立のなかに、両方の国の相剋が表現され、また、ボニファティウスは教皇であるにもかかわらず、ボニファティウスとカールの対立のなかに、二つの地の国の相剋が表現されていると言える。

シュナイダーは、地の国の力を定義して、「誘惑、支配、人類最初の敵・殺人者たちへの帰属、悪魔的な虚偽」²⁴⁾であるとしているが、しかし、彼は、文明への不信からあらゆる組織体を否認

するトルストイや、「力（権力）はそれ自体悪である」と考えるヤコブ・ブルクハルトの追随者であるわけではない。カール王が権力の重圧に耐えかねて、ケレスティヌスに「私から重荷を取り去ってください。王冠を取り去ってください」と言うと、ケレスティヌスは、「取り去ることではなく、それをあなたに与えることを望む。あなたはそれを戴き、正義を行ひなさい。贖罪は行為です」(341) と応える。国家権力はそれ自体として決して悪ではない、とシュナイダーは考える。それが法と力によって諸国民の間、および人ととの間に平和な秩序を保守するかぎりにおいて肯定される。もともと神は天地を創造したあと、人間にそれを支配する地位と役目を与えたのであった。しかしアダムの墮罪以降も、「支配の委託はもはや最初に意図されているようには実行されなくなっているとはいは、その委託は撤回されていない」²⁵⁾ からである。「人間は、神の国の市民として、この世の国へ赴くように命ぜられている。人間は、神の国がこの世の国を打ち負かし、その市民を解放すべく協力すべきである。」²⁶⁾ そうシュナイダーは主張する。

(2) 貸与としての権力と権力の自律性

シュナイダーは、権力の絶対化や自律化を「権力の悪魔化 (Satanisierung der Macht)」²⁷⁾ と呼んでこれを厳しく忌避している。そして、権力は本来、神によって人間に委ねられたものであって、「所有されえないものであり、ただ管理され得るだけである」²⁸⁾ としている。それは「封土 (Lehen)」²⁹⁾ のように貸与されたものなのである。そして、この作品においても権力はそのようなものとして描かれている。このことは、少なくとも4人の主要な登場人物すべてにあてはある。カール王ですらそうである。彼は最初のうちは専ら現実的・実際的な支配者としての側面が目立つが、時の経過とともに、権力に対して懷疑的になると同時に、それを委譲された重荷を感じるようになる。カール王は皇子ルードヴィヒに「われわれは、要請されていることを行うのであって、自分の欲することを行うのではない」(445) と語る。職務を引き受けることは、一つの要請なのであって、願望の充足ではない。彼は悲痛な調子で、「支配することを求められる人間、恐ろしい支配者の地位を受け継いだ人間」(291) の苦しみについて、さらに魂の困窮についてケレスティヌスに訴えている。彼はその不正な権力によって心を病み、歳月によってではなく現世の戦いに疲れ果てて、老いてゆく。

シュナイダーは1954年の『権力の本質と管理』という論文のなかで次のように書いている。「指導的な地位にある政治家によって行使される権力も、形成力として個人的な特徴をもっていかなければならない。彼が完全にひとりで、あたかも彼だけが全体を担い、彼だけが国民と世界の歴史を導かねばならないかのように、個人として決定を下すのでなければ、彼はあるべき彼ではない。倫理的なるものはもっぱら個人のなかで実現される。」³⁰⁾ これは権力の絶対化と自律化——それをシュナイダーは「権力の悪魔化」と呼んでいることはすでに述べたが——がますます進行してゆく現代社会において、もはや、その危機を救い得るものとしては、根本に立ち返ること、すなわち集団を構成している個人の自由な倫理的決断をおいては他にないというコンテキストの中で語っている文章である。この作品においても、権力はそれ自体、自律性をもち、人間を非人格化する性質をもつものとして描かれている。

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

敬虔で謙遜の化身のごときケレスティヌスですら、ほんの一瞬であるとはいえ、みずから権力の座を欲するという罪を犯したことからもわかるように、権力はたえず委託であることを逸脱し、私物化する危険性をもっている。さらに、彼においては、I. ツィマーマンも言っているように、教皇個人としての意思と彼の職務が求める諸要求とが食い違い、この矛盾のなかに権力と信仰との悲劇的な葛藤が存在している³¹⁾。彼はキリストに従う人間として剣を揮うことは許されない。敵をも愛し、敵のために祈ることを命ぜられている。しかし社会的な秩序と正義を守るためには剣による支配が必要とされている。「剣は正しいものとされています。しかし言葉なるキリストは正しい。これはわれわれを破壊する矛盾です」(411)。彼は職務の重圧のもとで自分を無と感じる。「私は何者でもありません。無です。職務がすべてです。それは私を撃ち殺す隅石となって私の頭上に落ちてきます。」(329)

われわれは、カール王に関して、支配者の地位を受け継いだ人間の魂の困窮についてすでに述べた。彼は、王位が遺産であり、委託であり、義務であり、要請であることを洞察しているにもかかわらず、自分を権力と同一化し、不正と知りながら権力を行使する。彼は人間としての心と意志を権力に売りわたしていると言える。さらに、この世の権力の儂さを知っているにもかかわらず、否、その儂さ知っているからこそと云つたほうがよいかも知れないが、彼は自分の権力によって、権力の強化と保障のために教会の祝福と天の恩寵を強要しようとする。このように、彼は国家の支配者という地位にあって自分の意志や理想を実現しようとするのではなく、国家としてのレーザン＝デタの強制に支配されつづけ、権力の悪魔化の犠牲になって滅んでゆく。

一方、ボニファティウスは、自分は神によって選ばれた人間だと思っている。そして、職務は一つの断念なのだと考え、自分は教会のためにのみ生きているという意識をもち、教会の権力を強化することこそ自分に課せられた使命だと堅く信じている。そのような人間が、実は、十字架の真理を誤解し、なおかつ権力欲に取りつかれないとすれば、どのような結果になるであろうか。「私は私の権利を拒否されることに我慢がなりません。私は剣を祝福し、かつそれを揮います。諸国民と王たちは私が両方の力（権力）をもっていることを思い知らなければなりません。」(386) 彼の権力は悪魔的な相を帯びる。正義感と使命感に燃えて行使された不正な権力ほど始末に悪く、恐ろしいものはないと言える。

(3) 権力の儂さ、自滅

「私は王だ。私は現在、この瞬間と関わりをもっている。今存在する権力、今つかまねばならない権力と関わりをもっている。なぜなら、権力は明日ふたたび消え去って、別の権力に屈するようになるからだ」(287) とカール王は語っている。

彼は、人間の賢明さと勇敢さにはおのずと限界があるため、権力は脆さをもっていることを意識している。それが「私は自分の権力に対して刺すような疑いをもっている」という言葉になって表われている。それゆえ、この世の権力のいっそうの拡大をはかるとともに、無理やりにでも、自分の力（権力）を天的な力によって補強しようとするのである。そして、ケレスティヌスの祝福がえられないかぎり、出陣しようとしている。

ボニファティウスは前任者ケレスティヌスの影響力を恐れてこれを捕らえることを命じ、ケレスティヌスが暗殺された後も、彼が放ちつづける威光に脅える。ボニファティウスは、反教皇派の二人のコロンナ枢機卿を罷免し、さらに彼らを破門に付したばかりでなく、コロンナ家の本拠パレストリーナ城を攻め、この町を跡形もなく破壊した。しかしアナーニにおいてその報復を受けることになる。このように、権力と権力が対立し、戦いが繰り広げられてゆく。ここに支配しているのは報復の論理である。

ケラー氏は、このドラマの持つ最大の欠点として、シュナイダーが歴史的な細部に忠実でありすぎたため、主要な筋に対する集中を欠き、表現の力強さを弱めていることをあげている³²⁾。われわれもそれは至極当然の正しい指摘であると思う。確かに場面の転換があまりにも多く、上演の際に演出家が苦労をすることは必至である。劇の纏まりという点から言えば、少なくともルードヴィヒの夢の中で演じられるコンラディンの戦闘場面と処刑の場面、およびドイツ王アドルフが殺害される場面と、その殺害者のオーストリア王アドルフが報復される場面、さらにその殺害者たちがアドルフの息子たちによって復讐されたことの報告などは不必要だと言える。しかし戯曲の形式上、誰が見ても欠陥だと思える過ちをシュナイダーはどうして犯したのであろうか。それは権力抗争によってもたらされる悲惨さ、権力の夢さ、報復の連鎖、およびそれに伴う罪責の連鎖を重要な主題として描きたかったからに他ならないと言える。

(4) 権力と罪責

シュナイダーによれば人間は二重の意味で罪責を負って生きている。個人の罪から生じる罪責と過去から継承する罪責である。

(1) 個人の罪責

ケレスティヌスは驚くべく鋭敏な良心と深い罪意識をもっている。彼は教皇の座をみずから欲したことがあったが、その罪深い考えに苦しめられる。さらに彼は個々の行為や意思だけでなく、人間としての生存そのものが罪であると考えている。なぜなら、生きることは他の生命を滅ぼすことになるからである。ケレスティヌスは教皇となったあとも、部屋に庵をつくらせ、豪華な王の宮殿で、かつて山中で行っていたのと同じような生活をしている。貧しい食事をとり、肉をいっぱい口にしない。また彼は世の中で悪が行われているのに、それを阻止できない場合には、自分にも罪があると感じる。そればかりではない。次の項、および「断念」の章で述べるように、彼は行為してもしなくとも、いずれも罪、あるいは、留まっても退いても罪という、二つの悪の選択しか残されていない状況に立たされる。

カール王は、不正な権力のもとで魂を病んでいたが、ケレスティヌス、および自分の息子と接触するなかで、次第に罪責意識を深めてゆく。そしてついに、地下牢で死んだ囚人の顔を見て、自分の罪責に直面する。それが他ならぬ「自分の行為の顔 (das Antlitz meiner Taten)」(454) であることを悟る。

ボニファティウスは自分の過去の行為がもたらす結果に恐れたり不安になったりすることはあるが、後悔するということを知らないし、罪や罪責の意識をもっていない人間である。そこにわ

れわれは悪魔的なものを認める。

(2) 継承された罪

ルードヴィヒは地下牢に囚人がいることを知つて大きな衝撃を受ける。彼はこう語る。「われわれは四六時中この悲惨の上で生きてきたのだな。われわれは御馳走を食べ、狩りにも出かけた。そしてわれわれの足下では、地中に埋もれて、世にも恐ろしい苦悩が苦しまれてきた」(300)。しかも、彼らは閉じ込められたときはまだいたいけな少年であった。今はもう20年以上も経っている。ルードヴィヒは、自分が直接罪を犯したわけではないが、権力者たちが積み重ねてきたあらゆる罪責のなかに巻き込まれていることを知る。

囚人たちの父であるコンラディンは、自分を捕縛したカール・アンジュー(カール王の父)に「私の父祖たちは罪責をおかさずに国々を手に入れはしなかったし、それらを守りはしなかった」(325)と語るとともに、自分もまた王として罪を犯したことを見定しない。彼はカール・アンジューによって処刑され、彼の息子と叔父の息子たちは捕虜とされ、その捕虜たちをカール王が遺産として受け継いだことになる。たとえ王たちが死んでも、彼らの罪責は消滅せずに後に残ることである。

囚人たちは強いられて父祖の過去の罪を負っている。彼らのひとりは、ルードヴィヒに、自分が捕らわれている牢獄には三種類の罪責があると言う。すなはち自分が祖先から継承した罪責、カール王の罪責、そしてルードヴィヒの罪責である。そして自分はこのような形で罪を償っているのだ、すなはち自分は「生きながらえている罪責(die lebendige Schuld)」(306)なのだと。このように罪責は、絡みつく鎖のように、何世代をも通じて子孫たちの現在を規定し、彼らを苦しめている。囚人は、「この地上に王たちが存在しなければなりません。(中略)しかし王たちが正しかったことは一度もありません」(305)と語り、コンラディンは、「私は経験しました。だれもこの世の色を帯びないでは、すなはち、どす黒い血の赤色を帯びないではこの世に足を踏み入れ、行動することはできないことを」(325)と語る。罪と結びついた権力の抗争が連綿とつづいてゆくことに呼応して、罪責もまた途切れることなく継承されてゆく。

(5) 牧する仕事としての権力の行使

ケレスティヌスは、教皇、すなはち天国の門の鍵を預けられたペテロの後継者として、いったい何を為そうとしたのであろうか。また為したのであろうか。

イエスは復活の後、弟子たちと朝食を共にしたあと、ペテロに向かって、三度「私の羊を牧しなさい」^[33]と言わされた。そしてシュナイダーは、「支配は愛の表現である。愛と光なる神の支配の模写である。地上におけるその印である。支配は牧する職務である。そして他でもなく、どんな小さな集団のなかにでもまどろんでいる不気味な諸力に対する支配である」^[34]と言っているが、ケレスティヌスはまさに人の魂を神へと導き、この地上に愛なる神の支配を打ち立てようとした。自分自身が救い主の真理を生きることによって教会を神の道へと導こうとした。しかし彼は「権力の戦場」のなかで、二つの悪の選択しか残されていない立場に立たされることになる。たとえばシチリア統治権問題を取り上げると、シチリアに対しては教皇が統治権をもっているが、今は

不法に統治されている。この不法を正すために権力を行使すれば戦争になり、悲惨な結果を招くことになる。しかし権力を行使しなければ、シチリアの不当な統治を容認することになる。したがって、権力を行使しても悪、行使しなくとも悪である。ケレスティヌスは後者の悪を選択することになる。

武器の祝福を拒否するケレスティヌスにカール王は、「あなたは正義を犠牲にするおつもりか」と詰問する。するとケレスティヌスは、「けっしてそうではない。それ（武器の祝福）は神の秩序に反することである。私は使徒の高座の前に立っている」と答える。さらにカール王は、「暴力を行使せずしてどのように正義を主張するおつもりか」と尋ねる。それに対してケレスティヌスは次のように答える。「もしかして祝福された剣というものはあるのかも知れません。それを揮う者は、彼の良心の最も秘められた審判の前で、自分は神の意志を行っているのだ、神の名において罰しているのだと言えなくてはなりません。かつて誰にそれができたでしょうか。私は知りません。この問いに答えるのは私ではありません。」(342) ケレスティヌスはけっして剣を揮わない。しかしこの悲痛な言葉のなかに二つの悪の選択しか残されていない者の苦悩が滲み出ている。この世にあって「傷を負わない良心によって権力を行使すること」は不可能なのかも知れない。われわれは第 2 次世界大戦中、ナチスの独裁に対して取ったボンヘッファーの態度を思い浮かべる。彼は、今や、かつて倫理上の判断を可能にしていた理性・原理・良心・自由といった尺度が全く使いものにならない時代になってしまったために、「善か悪か」という単純な二者択一はもう不可能であると考えた。そして、国家がそのるべき姿から逸脱して人々の権利を奪い、暴虐を働いたとき、教会の為すべきことの最後の可能性として、「車にひかれた犠牲者に包帯をしてやるだけでなく、車そのものを停める」行動に出ることがあり得るとした³⁵⁾。そして巨大な悪の歯車を停めるために、ヒトラーの暗殺という悪（殺人の罪）を選択した。

シュナイダーは暗殺計画には加わらなかったけれども、1947 年の講演で、1944 年 7 月 20 日の暗殺未遂計画に関与していた人々の「良心の決断」に深い理解を示し、彼らの死を気高い犠牲として讃えている³⁶⁾。

6. 断念

『大いなる断念』という作品名が示しているとおり、この作品の最も中心的なテーマは「断念（Verzicht）」である。唯一の例外であるボニファティウスを除いて、このドラマの重要な人物たちのほとんどは、それぞれの形において断念を行う。

ルードヴィヒは、その信仰の深さと純粹さにおいてケレスティヌスに最も近い人物である。前者が後者について、「私にとってこれほど大きな意味をもった人はいませんでした」(298) と語っているように、ケレスティヌスの放つ静かな影響力は、ルードヴィヒの魂の発展を誘い、彼をキリストに従う道へと導く。ルードヴィヒは王位継承権を放棄（Verzichten）し、司教となつて罪を償おうとする。何とかして思い止まらせようとするカール王に対し、彼は、「今はもはや支配の時代ではありません。償いの時代です。すべてが失われてゆきます。もはやひとつ清淨

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

なものがいるとき、われわれの王位に何の意味があるのでしょうか。私はそれを清めたいと思います」(446)と語る。彼は、自分自身の罪責だけでなく、他人の犯した罪、連綿と継承されてきた罪責を償おうとする。「コンラディンは死んだのでしょうか。彼は決して死はないでしょう。たとえ囚人たちがすでに死んでいたとしても、彼らは死はないでしょう。父上、われわれの家系の力は彼らが腐ってゆく地下室の丸天井の上に立っています。それゆえ、われわれの王家は腐ります。それゆえ私は権力から離れます。権力に関わりたくありません。(中略) 償いがなされない限り、王の名前をもつことは不名誉です。誰かひとりが罪責の連鎖(Zirkel)から出てゆかなければなりません。それを断ち切らなければなりません。それが私の生涯の力でできたら良いのですが。」(446)

断念は苦痛を伴うのが常である。ルードヴィヒはある意味で自分の意思に反して、外部からの無形の大きな力に駆り立てられて、教皇に傲う道に進むのであり、彼はそれを「恐ろしい道」(355)だと意識している。彼は王位を断念するだけでなく、ヴィオランタによせる愛をも断念しなければならないのである。彼の心が別の方向を向いていることを知つて立ち去る彼女に、彼は深い悲しみを抑えておだやかな口調で、「たとえあなたがお行きになつても、私はけつしてあなたと離れないつもりです」と語る。ルードヴィヒは王位を断念して司教になるが、しかし、この作品における「断念」は世俗の名利を捨てて聖域に入ることと必ずしも同義ではない。また現世における責任から退却することでもない。断念は消極的に退くことではなく、むしろ積極的な意味をもっている。たとえばカール王がケレスティヌスに、「私から重荷を取り去ってください。王冠を取り去ってください」と嘆願したとき、ケレスティヌスは、「私は取り去ることではなく、それをあなたに与えることを望む。あなたはそれを戴き、正義を行ひなさい。償いは行為である」(342)と応える。したがつて責任ある職務を引き受けることも一つの断念である。この罪の世に神の国の秩序をもたらすために、神によって高位につくことを命ぜられていると考えて王座を受け入れるとき、私的な生活、その楽しみや平穏、あるいは安全な傍観的な立場を断念しなければならない。したがつて「職務とは断念」なのである。また職務にともなう多くの労苦を担わなければならない。それゆえ職務につくことは一つの犠牲でもある。ルードヴィヒがボニファティウスによってフランスの最も豊かな司教区であるトゥルーズの司教に命ぜられたとき、「私に最も貧しい職務をお与えください。そうでなければ私の償いは償いになりません」と頼むと、ボニファティウスは、「貧しさのみが断念だとお前は思うのか。犠牲だと。貧しさがはなはだしい思い上がりであることだってあるのだ。職務、緋位(高位聖職位)は他ならぬ断念なのだ」(448)と応えている。そしてルードヴィヒは王位を拒絶するが、高位の司教としての重責を引き受ける。シュナイダーは現世からの逃避、消極的な断念を忌避する。彼は『ドラマの神学』という論文で、「地上的なものと天的なものを分離することは許されない。なぜなら、重要なのは、神によって命ぜられたことが地上で、歴史のなかで、全人と全存在によって果たされることだからである」³⁷⁾と述べている。

ケレスティヌスは平和な時代をきたらすために教皇の座についたが、自分の傲慢の罪と無能の

ために職務を果たすことができなかった。彼は自分の罪責と無能とを償うために聖なる冠を断念する。その際、およそあらゆる欲望を断念した人間ケレスティヌスには権力に対する執着はまったく見られない。それは実に謙虚で誠実で潔い態度であると言わなければならない。しかし、はたしてそうであろうか。シュナイダーはこの作品のモットーとして、先に引用した詩篇の言葉のほかにもう一つ、「お前の断念は、今や（神からの）離反であることが明らかになる」³⁸⁾ という言葉を掲げている。さらに彼は『権力の本質と管理』という論文のなかで、「キリスト教徒の政治家は、断念を決心しなければならないと思うケースが生じうる。断念は印象深いもので、この世の罪を掘り起こす歴史的・倫理的行為であり得る。しかしそれはまた逃避、したがって罪のようにも見える。（中略）断念は拘束力をもたない。職務は存在しつづける。権力は存在し、管理されなければならない。権力の荷が重すぎて放棄され、それが、権力の座につくことをもはや重すぎると感じない後継者の手に渡ったなら、世界はいっそう悪い状態になる」³⁹⁾ と述べている。この作品におけるケレスティヌスの断念についてもまったく同じことが言える。彼の断念は個人的な良心の呵責から彼を救うことになる。しかし反面、その倫理的に高貴に見える行為は、教会と信徒たちを悪魔的な権力者ガエターニ（ボニファティウス）の手に渡してしまう結果になる。したがって、ケレスティヌスにとって、教皇の座に留まることも罪、退くことも罪なのである。

教皇の座をおりたあと幽閉せっていたケレスティヌスは、かつてガエターニの助任司祭であつた暗殺者から、あの嵐の夜に壁の隙間から聞こえてきたのは天上の声ではなく、じつはガエターニが助任司祭に命じて叫ばせたものであると聞かされる。そのケレスティヌスにシュナイダーは、「私は選ばれていたし、今も選ばれている。私は使徒（ペテロ）の後継者だ」（447）と宣言させている。ここからも、作者がケレスティヌスの「大いなる断念」を正しいものと考えていないことが分かる。

ボニファティウスからパレストリーナの攻略を命ぜられた司令官ギード＝ド＝モントフェルレは、もはや流血を見たくないといって拒絶する。今や、彼はアッシジの聖フランシスの服を身につけている。枢機卿マテオ・ロッソも修道院に入り、カール王の尚書も自分の犯した罪を悔い、聖フランシスの服を着る。ボニファティウスは「断念がまるで伝染病のようにつぎつぎと広がつてゆくのはムルローネのペトルスの復讐なのだろうか」と叫ぶ。

カール王は、劇の大詰めで、王冠を断念し、さらに囚人を解放することによって自分の罪を償おうとする。このカール王の断念には、魂の牧者としてのケレスティヌスが果たした役割は大きい。シュナイダーはその過程を克明、かつ感動的に描いている。しかし、ケラー氏も指摘しているように、この断念は「内面への退却」⁴⁰⁾ であり、「疲れはてた行為人間のあきらめの結果」⁴¹⁾ という側面が強い。解放しようとした囚人はすでに死んでおり、時すでに遅しである。皇子ルードヴィヒがローマ熱で死んだという報せを受け取った王はその場に倒れる。彼の生涯を振り返ると、「空の空、空の空、いっさいは空である」⁴²⁾ という感が否定しがたい。

伝承に反して、この作品ではケレスティヌスは暗殺される。ボニファティウスは狂気と妄想に陥ったあげくに死に、ルードヴィヒは任地におもむく途上で病死し、カール王は失意のうちに敗

ラインホルト・シュナイダーの『大いなる断念』

残の姿を呈しつつ生きながらえる。このようにこの作品を支配している基調は人間の悲惨であり、死であり、無である。そこには絶望だけがあって、希望はどこにもないように思える。しかしシュナイダーはただ一箇所だけ希望を見出した場所があるように思える。それは、断念しても罪、断念しなくても罪という二つの罪の間で苦悩した人間の深い苦悩である。もはやそこにしか希望は存在しない。(このことに関しては稿を改めて論じたいと思う。)

註

- 1) Reinhold Schneider, Ein Manuskript vom 6. April 1954. In: Reinhold Schneider; Leben und Werk in Dokumenten. (Hrsg. v. Franz Anselm Schmitt), Walter, Olten u. Freiburg 1969, S. 169.
- 2) ダンテ『神曲』, 野上素一訳, 筑摩書房, 1962年, 12ページ。
- 3) R. Schneider, Ein Manuskript vom 6. April 1954. a. a. O. S. 169.
- 4) R. Schneider, Ein Manuskript vom 6. April 1954. a. a. O. S. 169.
- 5) 「ラインホルト・シュナイダーの平和思想」, 京都府立大学学術報告・人文, 第45号 平成5年11月。
- 6) R. Schneider, Offener Brief an den Herausgeber des "Christlichen Sonntag". In: Der Friede der Welt. (Hrsg. v. Edwin Maria Landau), Suhrkamp. Frankfurt am Main 1983. S. 71.
- 7) R. Schneider, Briefe an einen Freund. Mit Erinnerungen von Otto Heuschele, Köln und Olten 1961, S. 155. In: Ingo Zimmermann, Stimme in die Zeit; Das Friedenszeugnis Reinhold Schneiders. Evangelische Verlagsanstalt, Berlin 1963. S. 76.
- 8) 林健太郎編『ドイツ史』, 山川出版社, 1972年。井上幸治編『フランス史』, 山川出版社, 1981年。井上幸治編『南欧史』, 山川出版社, 1972年。
半田元夫／今野國雄『キリスト教史I』, 山川出版社, 1977年。
山本茂／藤繩謙三他編『西洋の歴史〔古代・中世編〕』, ミネルヴァ書房, 1988年。
ピーター・デ・ローザ『教皇庁の闇の奥——キリストの代理人たち——』(遠藤利国訳), リブロポート, 1993年。
- 9) 旧約聖書 ダニエル書 第7章3～8節。
- 10) R. Schneider, Der große Verzicht. In: Gesammelte Werke, Bd. 3, Insel, Frankfurt am Main 1978, S. 305. 以下、引用のあとの数字は、この版のページを表す。
- 11) ダンテ『神曲』, 前掲書, 279ページ。
- 12) 旧約聖書 ダニエル書 第7章13, 14節。
- 13) Werner Keller, Das Paradox der christlichen Tragödie. Reinhold Schneiders "Der große Verzicht". In: Geschichte als Schauspiel; Deutsche Geschichtsdramen; Interpretationen. (Hrsg. v. Walter Hinck), Suhrkamp, Frankfurt am Main 1981. S. 276.
- 14) W. Keller, a. a. O. S. 273.
- 15) W. Keller, a. a. O. S. 278.
- 16) W. Keller, a. a. O. S. 278.
- 17) ウィリアム・バークレー『イエスの生涯II』, 大島良雄訳, 新教出版社, 1966年, 45ページ。
- 18) バークレー, 前掲書, 45～46ページ。
- 19) W. Keller, a. a. O. S. 277.
- 20) W. Keller, a. a. O. S. 277.
- 21) R. Schneider, Weltreich und Gottesreich. In: Gesammelte Werke, Bd. 8, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 53.

- 22) R. Schneider, Weltreich und Gottesreich, a. a. O. S. 53f.
R. Schneider, Wesen und Verwaltung der Macht. In: Gesammelte Werke, Bd. 8, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 96.
- 23) R. Schneider, Weltreich und Gottesreich, a. a. O. S. 55.
- 24) R. Schneider, Macht und Herrschaft in der Geschichte. In: Gesammelte Werke, Bd. 8, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 127.
- 25) R. Schneider, Wesen und Verwaltung der Macht, a. a. O. S. 85.
- 26) R. Schneider, Weltreich und Gottesreich, a. a. O. S. 54.
- 27) R. Schneider, Wesen und Verwaltung der Macht, a. a. O. S. 104.
- 28) R. Schneider, Die Macht des Bösen und die gute Macht. In: Gesammelte Werke, Bd. 8, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 63.
- 29) Rita Meile, Nachwort. In: Reinhold Schneider, Gesammelte Werke, Bd. 8, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 465.
- 30) R. Schneider, Wesen und Verwaltung der Macht, a. a. O. S. 100.
- 31) Ingo Zimmermann, Stimme in die Zeit; Das Friedenszeugnis Reinhold Schneiders. Evangelische Verlagsanstalt. Berlin 1963. S. 83.
- 32) Werner Keller, a. a. O. S. 274.
- 33) 新約聖書 ヨハネによる福音書 第 21 章 15 ~ 17 節。
- 34) R. Schneider, Wesen und Verwaltung der Macht, a. a. O. S. 105.
- 35) 村上伸『ポンヘッファー』, 清水書院, 1991 年, 72 ~ 73 ページ。
- 36) R. Schneider, Leben und Werk in Dokumenten, a. a. O. S. 162.
- 37) R. Schneider, Theologie des Dramas. In: Gesammelte Werke, Bd. 8, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 242.
- 38) R. Schneider, Der große Verzicht, a. a. O. S. 261.
- 39) R. Schneider, Wesen und Verwaltung der Macht, a. a. O. S. 99.
- 40) W. Keller, a. a. O. S. 282.
- 41) W. Keller, a. a. O. S. 279.
- 42) 旧約聖書 伝道の書 第 1 章 2 節。

(1995 年 7 月 20 日受理)
(しもむら きはち 文学部教授)